

「大学生を対象とした農業体験と意見交換会」開催概要 ～さつまいもの苗植えから収穫、調理と意見交換会～

◆◆◆ 概 要 ◆◆◆

将来、管理栄養士、栄養教諭を目指して学んでいる鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻をしている学生7名が、同短期大学附属幼稚園の裏山にある農園において、さつまいもの苗植えから水やり、草取り、収穫、調理までの作業を同幼稚園の園児と共にを行った。収穫時にはJA鳥取中央の広報課長から、さつまいもの生態を学んだ。

そして、調理は学生が企画・準備を行い、園児（年長）と一緒にスイートポテトを作り、幼稚園の皆でいただいた。

また、学生は、さつまいもの成長記録について、同短期大学ホームページ「とっりの食育 うふっ！」に「チクチク山のさつまいも日記」と題したブログに掲載し、収穫から調理までの様子を画像とコメントを付して紹介をおこなった。

11月21日には、同短大において武庫川女子大学の藤本先生を講師に迎えて意見交換会を開催し、藤本先生の講演、学生における農業体験の取り組み発表の後、学生たちとの意見交換が行われた。

主催：鳥取地域センター

後援：鳥取短期大学



【苗植え～草取り・水やり】

日 時：平成23年6月21日 10時30分～12時

場 所：鳥取短期大学附属幼稚園裏山「チクチク山」

参 加 者：鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻学生 7名

鳥取短期大学附属幼稚園 年少から年長の園児

鳥取短期大学教授及び附属幼稚園先生

鳥取地域センター

作業内容：さつまいもの苗植え（畝立て等は園の先生達による作業）

水やり・草取り



【収 穫】

日 時：平成23年10月19日

10時45分～12時

場 所：鳥取短期大学附属幼稚園裏山「チクチク山」

講 師：鳥取中央農協広報課課長

参 加 者：鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻学生 7名

鳥取短期大学附属幼稚園 年長の園児

鳥取短期大学教授及び附属幼稚園先生

鳥取地域センター

講 話：鳥取中央農協広報課課長 宇崎 真理子 氏

紙芝居によりさつまいもの生態を学ぶ

作業内容：さつまいもの収穫

【調 理】

日 時：平成23年10月26日

10時30分～12時

場 所：鳥取短期大学附属幼稚園

参 加 者：鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻学生 6名

鳥取短期大学附属幼稚園 年長の園児

鳥取短期大学教授及び附属幼稚園先生

鳥取地域センター

作業内容：農業体験実施学生が事前に企画・準備し、園児（年長）と一緒にスイートポテトを作り、全園児に配る。



【意見交換会】

日 時：平成23年11月21日 13時00分～16時30分

場 所：鳥取短期大学

講 師：武庫川女子大学文学部教育学科 講師 藤本 勇二 氏

参 加 者：倉吉市立学校給食センター栄養教諭

鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻学生 45名

鳥取短期大学教授及び附属幼稚園先生

鳥取地域センター

内 容

(1) 講演「食と農をつなぐ食育 ～子ども育ての視点から～」

武庫川女子大学文学部教育学科 講師 藤本 勇二 氏

<講演要旨>

◇食物栄養の学生が畑に立つというのは大きな意味がある。厨房に立つ人が畑に関心を持ち、野菜を作っている人がこの野菜は誰が食べるのかと思いを馳せる・・・といったように食と農を繋ぐとは意義深いことであり、学生の皆さんは食と農を繋いでいく担い手である。

◇食と農をつなぐとは、人と人をつなぐということ。

◇子ども達は農作業という体験を通じて、自分で考えておこなう豊かな時間に触れている。

◇プロの大人に目を向けさせると子どもの取組みへの見方が変わってくる。



◇地域の多くの人とのつながりが大切であり、地域で子どもを育てるという合意ができる。

◇食と農が離れ、暮らしと食が離れ、暮らしが農と離れるということは、体験がやせ細り、生きる力がやせ細るということ。

◇自分の立ち位置にこだわりを持ち、プロの大人として子ども達と関わってほしい。

(2) 取組み発表



①「あぐりキッズスクールと食農教育の取組み」

鳥取中央農業協同組合 総務部 教育広報課

課長 宇崎 真理子 氏

◇「あぐりキッズスクール」は、いのちの基本は「食」と「農」という思いから始めた実践学習であり、農

作業を通じて、農地の大切さ、農業のすばらしさと大変さを感じてもらう目的で、おこなっている。そうした中で、収穫の喜びや自然の豊かさ、命の大切さを知り、故郷を愛する心が育まれるといった効果があらわれている。また、鳥取中央農協では、消費地である大阪市に出向き「小学校ふれあい交流会」の開催、女性大学「ルミナール」の開催などの取組みをおこなっている。

②「ふぁーまーがーずと園児の食農体験」

鳥取短期大学生活学科食物栄養専攻 学生 角 藍子

中井 美華

(さつまいもの苗植えから、調理までの園児との取組みを発表)

◇総括

食農体験について理解出来ないまま始めた取り組みであったが、草取り、収穫、調理とおこない、農を通した食育の大切さを学んだ。実際に子どもに関わり教えることのむずかしさ、知識不足を実感。ただ、こうした体験はなかなか経験することがなく、よい経験となり、今後に活かしたい。



(3) 意見交換会

テーマ「食の大切さを農業とともに考えよう」

《食農体験をおこなった学生》

〔体験活動感想〕

今回の農業体験を行うにあたって「食農」について理解不十分のまま始めて

しまい、前もってさつまいもの事について勉強しておけば良かった。

時間が経つにつれて子ども達と仲良くなれたが、子ども達との関わり方の難しさを知ることができた。



幼稚園の先生から「この農業体験は子ども達にとってよい経験となり、子ども達も楽しかったと言っており、この活動を今後も続けて欲しい。」と言われた。私たち学生もよい体験が出来た。この経験は社会のあらゆる場面で活かすことができると思う。今後も後輩にはこのような活動を続けてほしい。

《藤本先生》

実際に体験をしているから、学生の感想に嘘がない。

体験は将来の仕事にとってもプラスになる。体験というのは年を取ってからじわじわじわと効き、必ずプラスになる。

また、幼稚園の子ども達と仲良くなれたという話があったが、一緒に同じ物を触って、一緒に調理するなど、一緒に同じ物を見つめて育てていくというのは、食と農においてとても大切なことであり、皆さんはその貴重な体験をされたのではないかな。

《宇崎課長》

土にふれあう体験から食べるという経験まですると命の大切さがわかる。

ふれあいの場は多く体験した方がよい。

《鳥取短期大学 食物栄養専攻学生（食農未体験者）》

〔質問〕

栄養教諭等、栄養に関わる人間が食農教育にどのように関わって、どのように活動したらよいか教えて頂きたい。

《藤本先生》

それぞれが持ち場で出来ることがあると思う。

プロの大人としての自覚を持って子ども達と接して頂きたい。子どもをきちんと育てたいという思いは皆同じである。

大人も、出来ないことは出来ないと言えばよい。そうすると、そこを補ってくれる人達とつながり、そしていろんなことを行っているうちに学びたくなる、頑張りたいなといった気持ちが生まれ、そこから物事が始まっていく。皆でつながっていくことが必要。チーム皆で子どもを育てていくということを、考えて欲しい。

食に関わる者が農に関心を持つというのはとても大切なこと。発表の中に、子ども達とお別れの時、思わずハグをしたとあったが、それは共に過ごした農の時間があったから。大人が思っている以上に子ども達は真剣に取り組む、同じ思いを至らせる時間が学生と子ども達の距離を近づけ、さつまいもに対する思いも深くした。できるだけ皆さんには畑や土に興味を持ってほしい。

《宇崎課長》

サークルで多くを体験し、グループで活動し、コミュニケーションの場を作



ることが必要。

《倉吉市立学校給食センター 萬先生》

〔感想・質問〕

給食の献立には、毎日必ず子どもたちに伝えたいメッセージが込められている。そのなかで、地産地消といった農に関わるメッセージはとても多い。また、食と農を結ぶ取り組みは、知識と体験が両立してこそ生きた学びとなり、子どもたちの変容につながっていくと思う。講演の中で「子ども達が苦手な野菜を食べられるようになった」という行動の変容が見られたとあったが、その他、取り組みの中で、子どもたちの言動に変化がみられたエピソードがあれば紹介していきたい。

《藤本先生》

発表された学生が萬先生の施設に実習に行かれていたと言われたが、こうやって人と人がつながっていくことが大切。つながるためにはこだわりが必要。つながるとは仲良しよう、相手に合わせようでは、つながっていることにはならない。自分の専門のことにしっかりとこだわり、専門以外のことはその専門の方につなげば良い。自分の思いとか願いにこだわっていると自然と人はつながっていく。

エピソードとして、野菜スイーツの作成の過程で、茹でただけの野菜を食べた時に、今まで食べられなかったのはなんだったのだろうと思った。野菜の好き嫌いをなくしたいとは思いますが、野菜を残さないということを全員に求めると、子どもは窮屈になってしまう。幼稚園から小学校に上がるときに子どもはとても不安。それなのに「しっかりと給食を食べましょう」などと教科書に載っていると、子どもの一番の心配が給食となり、学校が嫌になるといったことがおこる。したがって結果として給食が食べられることを目指すことが大切。

徳島県で小学校教員をしていた時に「とくしま味噌汁プロジェクト」をおこなった。わかめと野菜と出汁を他市の小学校3校と連携し、それぞれを調達して送りあう取り組みを行った。その時に子ども達から出た感想は「いろんな味噌があり、味噌って万能ですばらしい。」「野菜の種類をたくさん言えるようになった。」「このおいしい野菜はおじいちゃんが育てた野菜。」など、子どもの言葉でたくさん感想がでてくる。時間をかけて取り組んだからである。農の魅力とは時間をかけることだと思う。

今、自動販売機モデルが重宝されている時代である。100円を入れたら100円の物が出てくるのが当然であり、100円のジュースが出てこなかったら怒る。全てお金を入れたら対価の物が返ってくる。しかし、ままならないことがた



くさんあるのが農の現場であり、思いどおりにならないことに付き合うということが、子どもが育っていく過程において意味がある。世の中のありとあらゆるままならないことに付き合えるようにするためには、農は大切だと思う。農や食の体験に向き合うと子どもが知らない間に野菜を好きになって食べてくれる。これには子どもそれぞれに物語ができたからである。皆で野菜を食べましょうでは、子どもはその時には食べてもずっと将来は食べるとは限らない。それぞれの子どもの物語を大切にすることが大切。

食には人それぞれの物語に付き合っていくという大きな可能性がある。食に関わろうとしている皆さんはとても大切なところに立っている。そして、こうして大切なところ立って仕事をしている素敵な人、農の現場の素敵な人達とこうやって繋がって、また新たな可能性が生まれる。

《亀山センター長》

農林水産省は今まで、生産者の方々との関わりがメインであったが、今は消費者の方との関わりも行うようになっている。そうしたこともあり、鳥取短期大学の協力をいただき、食農体験を行い、作る喜びを感じていただいたのではないかなと思う。今農水省では、生産者の方に、生産から加工、販売までおこなっていただく6次産業への取組みを進めている。皆さんは食の仕事につかれると思うが、食の仕事にかかれても農のことを考えていただきたいと思う。

今後もいろんな場面でこのような活動を続けていきたいと考えているので、宜しくお願いする。